

日々の暮らしのなかの「健康人間学」(1)

—さまよう若者のころとどう関わるか—

菅 佐和子

Health Anthropology on Daily Life (1)

Sawako SUGA

衝撃的な事件

西暦2000年まであとわずかの日にちを残すだけとなったこの時期に、京都南部で青少年らしき人物による小学2年生男児の殺害事件が起こった。被害者のことを思うと胸がふさがってしまって、言葉が見つからない。

それと同時に、まさに地元の事件なので、カウンセラーのひとりとしては、加害者が「自分の関わったクライアントでは絶対はない」という保証がどこにもないという不安を抱えざるを得ないのである。

私がこの事件を最初に知ったのは、あるマスコミ関係者からの、「このような事件の多発について」のコメントを求める電話によってであった。そのような電話は従来からときにはあったが、私は自分が直接に体験していないことについて確信をもって言葉を発することは苦手であり、また、断片的な言葉だけが一人歩きするのも心配なので、原則として丁重にお断りすることになっている。しかし、受話器を置いた後で、まず思い浮かんだことは、ある青年期のクライアントから聴いた話であった。その青年は、何年か前の神戸須磨の少年殺人事件のころ、不登校でずっと自宅にひきこもっていた。ひとりでテレビばかり観ていたらしい。その時、テレビでは連日連夜その事件が報道され

た。彼は加害者の残した声明文の内容に自分の気持ちと共通するものを感じたという。そして、「自分も同じことをしなければいけない」と強く駆り立てられたというのである。殺人が赦されるはずのない行為であることを、彼は勿論よく知っていた。しかし、それとは別の次元で「ここにお前の行くべきひとつの道がある」と誘われているような気がしてならなかったという。その内心の声を理性の力で抑えつけるのが「どれほど大変だったか……」と彼は語っていた。マスメディアを通してなにかの事件が報道されると、その真似をする者がいることは周知の事実である。誉められるようなことならともかく、明らかに自分にも不幸しかもたらさないことを、常識的な判断力をそなえているはずの人間が何故真似るのか、私には今一つ釈然としていなかった。その青年の話を聴いて、初めて納得がいったような気がしたのである。「自分がどうしたらいいのか、自分の居場所がどこなのか、自分が何者なのか、さっぱりわからなくて、ただ不安でたまらないとき、とにかくここに道があると示されると、それがどんな道であっても行きたくなってしまう」というのは、おそらく当事者でなければ言えない言葉ではないだろうか。同年輩の他者と触れあい、擦れ合うなかで自分というものの輪郭を形作っていくべき思春期に、長い間、他者と遮断

されてひとりぼっちでいることの怖さを改めて感じずにはいられないのである。幸い、彼はそんな体験を振り返って語れるようになっている。しかし、かつての彼のようなたくさんの若者たちが、昼間でもカーテンを閉め切りドアに鍵をかけ、ときには家具でバリケードを築いた自室で、食い入るようにテレビを観ているのである。あるいはテレビゲーム、ビデオ、漫画などひとりできる楽しみにふけるしかないのである。彼らにとって、それらが「現実」に思ってしまったとしても不思議ではあるまい。そのことを憂慮したとしても、報道を控えることなどできぬ相談であろう。また、ただ控えればすむというものでもあるまい。しかし、せめて、かつての彼のような視聴者にどのようなメッセージを添えるかを真剣に考えるべき時期ではないだろうか。私も、ささやかであっても自分が発言できる場で、彼の言葉を伝え続けなければと思っている。

ある記事に学ぶ

この事件が起こる少し以前に、ある新聞(1999年11月25日・毎日新聞)でたいそう印象のこる記事を目にしていたのでここに引用してみたい。米国の著名な家庭セラピストであるというロビン・カー＝モース女史の講演である。

「(前略) 脳の発達段階と暴力的な犯罪の科学的な研究の一環として、私たちは約2年間、多くの人たちにいくつかの質問をした。(中略) その結果、心に怒りやしつと心などを抱いたとしても、それを暴力に転化することなくいられる人たちには、ある共通した能力があることに気づいた。その一つは、人に感情移入ができる、いわば他人に共感できるということ。こういう人たちは、人を殺すことにたいして、実際の場面を想像しながら、気持ち悪いという感情になる。こういう感情を抱くのは、幼少時に親や周囲から温かいまなざしを注がれた幸せな人だと思う。少し専門的に言うと、この共感できる能力は、脳のうち眼窩前頭皮質という部位の

発達と関係があり、赤ちゃんのときに愛情を注がれながら上手に養育されると、この皮質がきちんと成長する。ほかにも、怒りなどの感情の抑制方法を知っていることや、建設的な問題解決の能力があることもやはり眼窩前頭皮質の発達と大きなかわりがある。今、暴力や犯罪が起きて、その要因について、決して赤ちゃんのころまでさかのぼって考えようとする人は少ないだろう。だが、これまで話したことからも分かるように、本当に犯罪を少なくしようと考えるなら、脳の発達が著しい胎児から2歳児までの33カ月間の情緒教育がいかに大切なものか、分かってもらえると思う。」

若者たちの求めるもの

研究室のパソコンでここまで書いて私は冬休みに入った。しばらくパソコンに向き合わない間に、和歌山で同様の事件が起こってしまったのである。心配していたことが早速現実化してしまったような気がして、暗澹とした気分になるほかなかった。

今、若者たちの心の健康のため早急に必要なのは何かと問われたら「中学を卒業してしまった人も気軽に寄り集える場所」と答えたい。

診断名の付くような「心の病気」でなくても、そんなにお金がなくても、自由に出かけて来て、仲間たちやスタッフたちと雑談をしたり、手仕事をしたり、ごろんと寝ころんでくつろいだり、必要があれば別室でカウンセリングを受けたりできるような小さなスペースが、町のあちこちにあればどんなによいであろう。

仕事に疲れた中高年の人も時にはこっそり昼寝をしにきてもよいだろう。一人暮らしなどで話し相手の少ないお年寄りも、気がむけば散歩の途中に一服していけばよい。小春日和には窓から猫がそっと顔をのぞかせ、軒先で雀たちが群騒ぐこともあるだろう。地面からは名もない草花の芽が出たりするかもしれない。建物などは立派でなくても一向にかまはないのである。ただ、節度を保ちつつ他者を柔らかく受け容れ

る空気があればいい。

あくまでも「来る者拒まず、去る者追わず」がモットーだが、他の目的に利用されないようにきちんとした「守り」のあること、メンバー間の人間関係の調整役が存在することが条件である。何より大切なのは、専門性を備えた適切な「人」が得られるかどうかであろう。そのためにある程度の人件費が不可欠となる。

そのような場は既にあちこちにあるとはいえ、費用の問題と責任の問題がネックになって、やってみたいと思う人はかなり存在している。なかなか実現に向かって踏み出せないのも実状であろう。かくいう私もそのひとりであるのだが、自分のできないことを誰かに期待するのは甘いかもしれないが、そのような場をもっともっと増やすことが、今、切実に求められている事は確かであろう。

高齢者の孤独

わが家の老人性痴呆症の母親は、自分のまわりをころころにあらすじといった風で慌ただしくバタバタ動きまわる私に「あのね、あのね私ここにいるよ」と突然呼びかける。「そんなことは見れば分かる。私は猫の手も借りたいほど忙しいのに……」と呟きながらも、物理的には傍らにいても「ころころにない」状態では寂しいのだろうとハッと気づくのである。しかし、「より早く、より多く、より高く」といった価値観が普遍的である現代社会において、働き盛りの人間の多くは、実のところ「自分のことで精一杯」なのではないか。ころころのゆとりが持てないのも無理からぬことといえよう。

高齢者のみではなく、子どもたちも、忙しい大人のころころから閉め出されたような気がして寂しさを感じているのではないだろうか。物わがりのよい子ほど、親の都合を汲み取り、求めることを諦めて、はやばやと「手の掛からない良い子」になって、無難に居場所を確保するしかないのかもしれない。そんな若者たちの我慢の糸がもしも脆かったとき、一体何が起こるのだろうか。

何年もの引きこもりの後、ようやく私たちの勧めで精神科のデイケアに週1回だけ通い始めたPさんは、「いつまでたっても集団にとけ込めないから行くのが嫌だ」とブツブツ言い続けている。私の母親も高齢者のデイケアに通ってはいるが、週4日は行ってほしいという私の願いにも関わらず「4日も行くのはしんどい。2日でよい」と勝手に減らしたうえに「今日は休みのはずや」と折りにふれて勝手に休みを取ろうとする。Pさんに母のことを話すととても共感していた。

「そんな年齢なのになんでデイケアに行かないあかんのや？可哀想やないか……家で好きなようにしてたらええのに」

Pさんも私の母も、どのように良い場であっても、人工的に設定された場には適応しにくい人間なのかもしれない。そのことを感じつつも、今のところ他に参加できる場のない二人がデイケアからドロップアウトしないように、私は踏ん張って押し止めているのである。

アニマル・セラピーの意義

それ以来、Pさんはときどき私の母のこと、母の最愛の黒猫のことをたずねて下さる。猫は口の悪い人からは「過保護ネコ」とか「マザコン・ネコ」と言われているが、母とは文字どおりの「自己一対象」の関係にある。子猫のころは、私が母と喧嘩をすると、必死になって私の足を噛んで止めようとしていた。気を使いすぎたことも影響したのかどうかは定かでないが、「アレルギー性皮膚炎」で夏になると毎年、みるも無惨に禿げてしまうのである。その度にあちこちから非難のまなざしを向けられるのは私である。「ちゃんと洗ってやらないから」「獣医さんに連れていったか？」と怠慢をそれとなく責められる。できれば、獣医院の領収証を首輪に巻き付けておきたいのだが。それに、猫の常として、時にはよその庭で迷惑行為をすることもある。そんなときお叱りをうけるのも私である。ともあれ、冬になって猫の毛が黒々と生え揃うと私は心底ホッとするのである。

同じことは母についても言える。母が徘徊したり転んだりよその花を折り取ったりすると、やはり私の世話が行き届かないということになるようである。「患者のために家族に注意をあたえる」ということは「錦の御旗」を打ち振るようなものである。家族はつつしんで拝聴するしかない。しかし、家族もまた心身ともに疲れており、そもそもの力量も千差万別であり、努力にも限界があるということがどうしても見落とされがちになるのではないか。母の介護を通して、カウンセラーとしての私が身にしみて感じ学んだ最大のことは「自分もクライアントの家族に対してそうだったのではないか」ということである。

とにかく、猫は私にとってかけがえのない老親介護のパートナーなのである。猫をそのために「利用する」という感じではない。猫が「私たちとともに生きてくれている」という実感である。

もう10年近く母のそばに付き添ってくれているこの黒猫に神様のご褒美を下さったのだろうか。昨秋、可愛い子猫姉妹がどこからともなく現れた。どういう訳か、妹猫がその禿げた黒猫に猛然と懐いてしまったのである。黒猫は雄なのに、なにを間違ったのか「醜の母」を投影したらしい。私が黒猫を箱にいれて隠すと、小さな身体と可愛い顔からは信じられないようなドスのきいた声で怒って鳴き立てた。大変な迫力である。

遂にわが家に居着いたその子猫が、或る夜、出るはずのない黒猫の乳首を音をたてて吸っている姿を見たときは驚いてしまった。黒猫もさぞ焦ったことだろう。しかし、追い払いもせず、じっと耐えていたのである。

子猫が居着くと、母は今までの黒猫への恩義(?)をちょっと忘れたのか、とたんに子猫を「猫かわいがり」しはじめた。黒猫は内心はす

ねているのだろうが、私が大きな声で「子猫たちはあんたの押し掛け養女。あんたの顔を立てて、うちにおいてあげてるんだよ」とわざとらしく言い聞かせるので怒るに怒れないのか、食べ物譲ったり舐めてやったりと、良き「養父(養母?)」の役目を果たしている。

母は一挙に3匹に増えた猫たちに目を細め、折に触れて話しかけている。「この子たちを見ていると生きる元気が出てくる」というのは偽らざる実感であろう。猫たちに家の中をさんざん荒らされながらも、小動物との共生のもつ意義には奥深いものがあるとしみじみ感じる昨今である。高齢者だけではなく、ひきこもっている若者たちにも、動物との交流の機会を是非持ってもらいと切に思う。

いささかとりとめもなく、日々の暮らしのなかで、人間のこころの「健康」に関して切実に感じ考えていることを思いつくまま文字にしてみた。私にとっての「健康人間学」とは日々の暮らしと直結したものであるからである。しばらくはこの試みを続けていきたいと思っている。

この稿を書き終えたころ、冒頭にあげた事件は加害者と目される青年の自殺によって幕を閉じた。カウンセラーとしての私たちにはますます大きな課題が遺されたような気がしている。

参 考 文 献

- 1) 松井紀和：小集団体験。東京：牧野出版，1991
- 2) 松本雅彦：こころのありか。東京：日本評論社，1998
- 3) 森崎和江：いのちの素顔。東京：岩波書店，1994
- 4) 富田富士也：仕切り直しの巡礼。東京：柏樹社，1995
- 5) 氏原 寛・山中康裕編：老年期のこころ。京都：ミネルヴァ書房，1994